

現地の文化を取り入れた国語教育の取り組み

前香港日本人学校香港校中学部 教諭

兵庫県明石市立魚住中学校 教諭 今村美紀

キーワード：現地理解、国語教育、日本文化、教員研修

1. はじめに

香港には約27,000人（平成26年10月現在）の日本人が在留し、日本人学校の生徒数も中学部約200名、小学部2校計約800名と多く、香港日本人学校は、在外教育施設の中では大規模な日本人学校であると言える。日本人の多くが居住している香港島と九龍半島の中心部には、日本人対象の日本の大手学習塾があり、中学部生徒の通塾率はかなり高い。海外に生活していても日常生活の大部分は日本語を使って生活していること、学校に加えて塾での授業も受けていることから国語力の著しく低い生徒は少ない。

しかし、中には両親のうちのどちらかが香港や他国の外国人で、家庭での会話が英語や広東語、中国語（普通話）である生徒も少なからずいる。生徒の中には、幼少期からの日本語の積み上げが少なく、語彙の乏しい生徒や、助詞の使い方に課題のある生徒も見受けられる。

そのような生徒にも日本で学ぶことになったときに困らない国語力を身につけさせるための授業実践や、現地文化に触れたり、日本の外から見た日本について考えたりするための授業実践について紹介したい。

2. 教科指導の実践

(1) 語彙の習得と「書くこと」の指導

中学部では毎朝8:30から8:40までの10分間を朝読書の時間として設定し、自分の好きな小説や新書などを読む時間としている。読書を好み、語彙を多く身につけている生徒が多い反面、香港で日本の書籍は手に入りやすく、日本語の本を読む機会には恵まれているとは言い難い。また、日本のテレビをインターネットテレビなどから視聴できる家庭が多く、音声言語としての日本語に触れる機会が多い生徒もいるが、そのような環境がなく、学校以外の場で日本語に触れる機会が極端に少ない生徒もいる。そこで、そのような生徒にもできるだけ多くの語彙を身につけさせるために、教科書の新出漢字を使って短文を作るという課題を定期的に出し、言葉の意味を調べたり、実際に使えるように短文にしたりすることをくり返しおこなった。これによって、言葉の意味を知るだけでなく、実際に使えるような形で身につけることができるようになりつつある。

両親または父母のどちらかが外国人である家庭に育った生徒の中には、助詞のつかい方に誤りの多い生徒も多く見受けられるため、授業の中で作文を書く機会をできるだけ多く設け、添削によって正しい使い方を身につけられるようにした。

また、海外で学び生活するという貴重な経験や、そこから気づいたことや考えたことを他者にわかりやすく伝えたり、自分自身の強みとして活かしたりできるようにするために、そのような経験やそこから得たことを文章にまとめる機会を多くするよう心がけた。

(2) 日本文化に親しむ

本校では、1年時に香港城市大学、中文大学の2大学と桂華山中学校、2年時には修学旅行先の大学等の学生、香港の現地校である宣基中学校、3年時には香港大学との交流会をもっている。そのいずれの交流会においても、日本の文化について紹介したり、質問を受けたりする機会がある。着物などの「衣」、寿司や和菓子などの「食」、畳や屋根瓦など「住」に関わる内容を調べ、発表する生徒が多いが、毎年1月に国語の学習の一貫として実施している百人一首を日本の伝統的な遊びとして紹介したり、国語の授業で学習した短歌や俳句などの韻文について

紹介したりする生徒も見られた。

国語科の授業においても2年生の短歌や3年生の俳句の単元では実際に短歌や俳句を詠み、お互いの作品を読み合っただけで批評し、ミニ歌会や句会をおこなった。また、在外教育施設からの応募を受け付けている短歌コンクールや、日本の新聞の海外版に作文を応募し、作文を書いたり俳句や短歌を創作したりすることへの動機付けとした。そのような機会を利用することによって、他者の作品に触れ、日本文化への関心をさらに深めることができたと考えている。

3学期には全学年書き初めをおこなっている。香港には日系のスーパーマーケットが多くあり、筆や墨汁など、比較的日本の物は手に入りやすいが、書き初め用の半紙は現地調達が難しいため、毎年日本に注文して取り寄せている。日本人主催の書道教室などもあり、日本と同様に書道に親しむ機会をつくりやすい環境であった。

生徒の作品は校内に掲示してお互いに見合い、励みになるようにしているが、2月から3月にかけて特に湿度の高い香港では、すぐに作品が湿気で痛んでしまうという課題があった。

(3) 現地の文化に親しむ

多くの生徒は限られた期間の香港での生活になるため、現地の文化に親しむ機会を増やしたいと考えた。香港では旧正月に赤い紙に縁起の良い言葉を書いたもの「揮春（ファイチュン）」を玄関や門に飾る。中国本土では元来「対聯」という7文字の対句を用いるが、香港では4文字の「恭喜發財」などのお祝いの言葉を書くことが多い。揮春は現地の文具店やデパートなどで手に入るが、旧正月の2週間ほど前になると街頭でも売り始める。金色の墨汁でめでたい言葉を手書きする屋台も人気だ。揮春の言葉はそのまま新年のあいさつにも使えるものが多い。人気のある言葉には以下のようなものがある。

新年快樂（あけましておめでとう） 恭喜發財（財産ができますように）

年年有餘（毎年余禄がたまりますように） 生意興隆（商売がうまくいきますように）

合家平安（一家が幸せになりますように） 出入平安（平穩無事に過ごせますように）

龍馬精神（龍馬のように勢いよく） 如意吉祥（思い通りにいきますように）

年明けの1月最初の書き初めの授業の後で生徒にこの「揮春」に取り組ませた。「揮春」の意味を説明した後、書き方について指導した。いろいろな書体があるが、「隸書」という、生徒にはあまりなじみのない書体で書くことにし、筆の持ち方や運び方について指導した後、赤い画用紙に「福」の1文字を書いた。自宅マンションの隣室の香港人家庭の玄関や、街中の商業施設などで目にしていた生徒も多く、「自宅玄関に貼る」と持ち帰った。旧正月にはお互いに合ったときにこのような言葉を掛け合う習慣にも興味を示す生徒が多くいた。

また、総合的な学習の時間の取り組みとしておこなった大学生との交流の中で、香港に現存する数少ない史跡を巡り、昔の香港について大学生が中学生に教えてくれる活動がある。その中で、昔の中国の科挙の制度や学校について説明を受けたり、昔の学校を実際に見たりしたことが、1年後の漢詩の授業の中で説明することと関連していることがあった。大学生から聞いた話を思い出し、自分たちが実際に見た香港に残る昔の学校や城壁に囲まれた町の様子を思い浮かべながら興味をもって学習することができた。



揮春の製作の様子

3. 研修

(1) 現地校職員との交流を通じた教職員研修



桂華山中学校と香港日本人学校教員

職員研修の一環として、中学部のある寶馬山にある現地の学校、桂華山中学校と定期的に研修をおこなった。そこでは、教科別にお互いの学校の授業を見て、日本と香港の学習内容の共通点や相違点、指導方法について話し合う機会をもつことができた。平成26年度の研修会で、私の国語の授業は古文「竹取物語」の単元で、登場人物の人物像について読み取った後、小グループでの話し合い活動を取り入れた授業をおこ

なった。桂華山中学校の先生からは、中国語でも「古典」を扱うことも多いが、なかなか興味をもって学習に取り組ませるものの難しさや、話し合い活動を用いて授業を進めることで、生徒に主体的に授業に取り組ませることができるなどの意見をいただき、私たちの抱えている課題との共通点が多いことに気付くことができた。

また、現地校の授業見学では、日本の国語科にあたる現地校の中国語の授業は、大学入試等の試験に向けて「書くこと」が授業の中で重視されていると感じた。現地校は中高一貫の6年制の学校が多いが、日本と同様に進学のための学習塾や、英語、中国語などの語学学校に通う生徒が多く、大学受験に向けての準備の方法は日本と似ている点が多い。

(2) 現地理解のための自己研修

授業で「揮春」を実践するにあたって、私が広東語を習っていた香港人の先生に紹介してもらったカルチャースクールに「揮春」の授業を受けに行った。筆の持ち方から運び方、未年にちなんだ言葉などを丁寧に教えていただいた。当日は香港のローカルテレビ局の撮影があり、授業を受ける様子がテレビで放映された。現地では、このような伝統的な行事に対する関心が薄れつつあり、古くからある自国の文化を若い世代にも知らせ、大切に残していこうとする様子が覗えた。この他、点心や月餅などの料理教室に足を運び、食文化についても体験を通して学ぶ機会をもつことができた。



揮春教室テレビ放映の様子

また、アジアのハブ空港である香港空港からは、中国本土へもたくさんの直行便が出ており、比較的安価な費用で中国の各都市へ移動することができる。3年生の教科書に掲載されている「故郷」の作者である、魯迅の生家がある紹興に杭州経由で足を運ぶことができた。杭州から紹興へは鉄道かバスでの移動であり、香港と違って英語がほとんど通じない中国本土では移動に戸惑うこともあったが、魯迅が青年期までを過ごした家屋や使用していたものを実際に自分の目で見たり、水路が残る町並みを歩いたりした話を小説「故郷」の単元では生徒に聞かせることができ、作品への興味、関心を引くことにつながったと考えている。

今回の香港での滞在中にはできなかった、漢詩に詠まれた名所・旧跡にも近いうち是非訪れ、作者が見た風景、感じた気持ちを疑似体験し、実感をもって生徒に話せるようにしたい。

4. おわりに

縁あって、この香港の地で3年間、国語を教えることができた。生活をしている中では漢字文化をもつ香港と日本は似通っている点が多く、不便を感じることはさほどなかった。外国人が多く生活する香港では、言葉をよ

く理解できない私にも大変親切にしてくれる人が多く、赴任する前に抱いていた中国、香港のイメージは実際に生活することで良い方に大きく変わった。また、赴任2年目に香港で起こった学生による大規模なデモは、私たち大人にとっても中学生にとっても中国や香港、そして自分たちの生き方についても深く考えさせられる出来事であった。そしてその中で香港人がどのような思いを抱いているのかを実際に直接聞くことができたことも貴重な経験となった。

学校教育においても意外にも共通点が多く、珍しさを感じることは多くはなかったが、日本を出て異文化の中で暮らして改めて日本の教育や文化について考えたとき、日本にいたときには気付くことがなかった点に気付くことが多くあった。生徒にもそのような気づきをしっかりと振り返り、自分の言葉でまとめ、他者に伝えられるようにすることができたことは一つの成果だと考えている。また、日本各地から集まってきた同僚からいろいろな方法や考え方を学ぶことができたことも大変貴重であった。

この3年間で得た気づきや学びを積極的に日本の子どもたちに伝えるとともに、新しいことや未知のことをもっと貪欲に知ろうとする姿勢を自分自身がもち続けていきたい。